Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies,
Showa Women's University, 2023, Vol. 25, 41-51.

心理学科卒業生の生涯キャリアに関する実態調査

野嵜　茉莉・岩山　孝幸・渡邊　寛・池上　真平・松澤　正子

問題と目的

「キャリア」とは何だろうか。昭和女子大学にはキャリア支援センターがあり、就職活動を支援する様々な講座を実施し、また、多くの在学生が就職活動の個別相談に利用している。キャリアコンサルタントやキャリアアップなどの言葉も耳にしたことがある人が多いだろう。これらは、いずれも「仕事」と結びついて「キャリア」という言葉が使用されている例である。一方で、山﨑・平林（2018）は、キャリアの語源は、ラテン語の「車輪のついた乗り物」「荷車」にあり、その後「道」「馬車競技のコース」へと意味が転じてきたと説明している。そして、「キャリア」とは、狭義においては人生における「職業生涯上の仕事経験の連鎖」であるが、広義においては「個人の生涯にわたる生き方そのもの」ととらえることができる（山﨑・平林，2018）と述べている。

男女共同参画白書（内閣府，2017）によると、日本において、65歳未満の女性の就業率が2006年から2016年の間に著しく上昇したことに加え、女性の就業について「子供ができても、ずっと職業を続ける方がよい」と考える人が調査開始以来初めて男女共に5割を超えるという結果となり、女性が職業を持つことに対する意識の変化が見られた。一方、結婚については、平成25年版厚生労働白書（厚生労働省，2015）で、近年の日本では結婚の自由度が高まり、結婚するのが当たり前といったような社会的な圧力が弱まったことが指摘されている。婚姻の状況について、令和4年版少子化対策白書（内閣府，2022）において、2020年の婚姻率（人口千人当たりの婚姻件数）は4.3で過去最低となったこと、女性における50歳時の未婚割合が1990年に4.3％、2015年に14.9％、2020年に17.8％と徐々に増加していることが報告されている。また、出産についても、夫婦の完結出生児数（結婚持続期間15から19年夫婦の平均出生子ども数）が0人である夫婦の割合は1997年に3.3％、2005年に5.6％、2015年に6.2％と徐々に増加していることが報告されており（国立社会保障・人口問題研究所，2017）、結婚しても子どもを持たない夫婦が少しずつ増えていることがわかる。

これらの点から、日本において女性の働き方・結婚・出産といった点において多様な選択が可能になってきており、生き方の幅が広がっていることがわかる。また、政府においては、近年、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現が推進され、仕事と同時に家事・育児、近隣との付き合いなどの生活を充実したものとし、人生の生きがい、喜びを増すことの重要性が謳われている（内閣府 男女共同参画局 仕事と生活の調和推進室，2008）。以上を踏まえ、女性の「キャリア」について、「仕事」という狭義ではなく、「個人の生涯にわたる生き方そのもの」という視点で考えることが重要であると言える。本研究では、これを女性の「生涯キャリア」と呼ぶこととする。

現代を生きる女性がどのような生涯キャリアを築いているのかについて調査をすることは、これから社会に出ていく女性、つまり、大学においては在学生が自分の生涯キャリアを考える上で重要な情報となる。生涯キャリアの実態を知るためには、幅広い年齢の人を対象にした調査をすることが必要だと考えられる。昭和女子大学においては、卒業時点の学生の就職先・進学先は、ほぼ全員について正確に把握されている。しかしながら、卒業後どのように過ごしているのかについては、限られた卒業年の人を対象にした卒業生調査（昭和女子大学，2020a）が行われているにとどまっている。

2022年度に昭和女子大学心理学科は開設から30年を迎えた。この機会を生かし、女性の生涯キャリアについて調査することの重要性を踏まえ、昭和女子大学心理学科の卒業生がどのような

生涯キャリアを築いているのか、心理学科での学びは生涯キャリアにどのように活かされているのかを明らかにすることを目的とし、心理学科の30年間の卒業生を対象とした生涯キャリアに関する実態調査を行うこととした。

方　法

調査時期・調査方法

2022年8月から9月にかけて、調査項目を尋ねるGoogleフォームをはがき及びメールで周知した。

調査対象

昭和女子大学人間社会学部（2003年度入学者以降、2003年より前は文学部）心理学科の卒業生のうち、心理学科が設けているOGネットワークに登録した者463名（2012年度以降の卒業生439名、2012年度以前の卒業生24名）[1)]、及び、2012年度以前の卒業生でOGネットワークに登録していないものの、心理学科20周年記念行事の際に同窓会名簿の住所に送付した案内はがきに返信があった者399名を対象とした。住所が登録されていた860名にはがきを送付し、メールアドレスも登録されていた524名にはメールも送信した。住所の登録がなくメールアドレスのみが登録されている者はいなかった。返送分を除き、はがきは618名、メールは305名に届き、このうちの156名から回答があった。回答者の年齢層の内訳をTable 1に示した。

調査項目

調査は11項目から構成されていた。以下に項目の詳細を述べる。なお、項目の設定にあたっては、事前に在学生に「人生の先輩である卒業生に聞いてみたいこと」を募り、寄せられた内容を参考にした。

1．<u>回答者の年齢</u>　－25歳/26－30歳/31歳－35歳/36－40歳/41－45歳/46歳－の6つの選択肢からあてはまるものを1つ選択してもらった。
2．<u>日常的に行っている活動について</u>　回答者のライフスタイルについて調査するため、以下の10個の選択肢を提示し、日常的に行っている活動について複数選択可で回答してもらった。選択肢は、仕事（産休、育休も含む）/家事/育児/介護/自己研鑽（資格勉強、通信教育など）/学業（専門学校、大学院など）/求職・転職活動/余暇活動/地域活動・ボランティア/その他であり、その他を選択した場合は、さらに具体的な回答を求めた。
3．<u>現在の仕事の雇用形態について</u>　2の質問で「仕事」を選択した回答者のみに、現在の仕事の雇用形態について、以下の6つの選択肢からあてはまるものを1つ選択してもらった。選択肢は、正社員/嘱託または契約社員/派遣社員/パート・アルバイト/自営業・家族従事者/その他であり、その他を選択した場合は、さらに具体的な回答を求めた。
4．<u>現在の仕事の業種について</u>　2の質問で「仕事」を選択した回答者のみに、現在の仕事の業種について、以下の13個の選択肢からあてはまるものを1つ選択してもらった。選択肢は、建設業/工業/製造業/情報通信業/運輸業/卸売業・小売業/金融・保険業/不動産業/宿泊業・飲食業/教育・学習支援/医療・福祉/サービス業/その他であり、その他を選択した場合は、さらに具体的な回答を求めた。なお、選択肢は昭和女子大学（2020a）と同じ分類を用いた。
5．<u>卒業後の最初の勤務先に勤務しているかどうか</u>　卒業後の最初の勤務先での勤続状況について調査するため、卒業後の最初の勤務先に現在も勤務しているかどうか尋ね、はい/いいえのいずれかを選択してもらった。
6．<u>卒業後の最初の勤務先での勤務年数について</u>　5の質問で「いいえ」を選択した回答者のみ

Table 1　回答者の年齢分布

年齢	*N*	割合（%）
－25歳	27	17.31
26－30歳	39	25.00
31－35歳	28	17.95
36－40歳	25	16.03
41－45歳	21	13.46
46歳－	15	9.62
無回答	1	0.64

に、卒業後の最初の勤務先での勤務年数について、以下の5つの選択肢からあてはまるものを1つ選択してもらった。選択肢は、1年未満/1年以上3年未満/3年以上5年未満/5年以上10年未満/10年以上だった。

7．取得済みの心理学関連の資格について　心理学関連の資格の取得状況について調査するため、以下の7つの選択肢から取得済みの資格をすべて選択してもらった。選択肢は、公認心理師/臨床心理士/社会調査士/認定心理士/認定心理士（心理調査）/学校心理士・准学校心理士/その他であり、その他を選択した場合は、さらに具体的な回答を求めた。なお、選択肢に挙げた資格は、2022年度時点で本学心理学科または大学院心理学専攻で取得可能な資格（公認心理師、臨床心理士については受験資格の取得）である。

以下の項目8～11では、卒業後に大学生活や心理学科について、また生涯キャリアについてどのように考えているのかについて調査するため、自由記述による回答を求めた。

8．心理学科で、特に印象に残っているエピソードについて
9．昭和女子大学心理学科で学んだことで、今に活きていると思うことについて
10．「大学時代にやっておけば良かった」と、今感じることについて
11．キャリアを選択する中で大切にしてきたこと、これから大切にしていきたいことについて

倫理的配慮

調査対象者に対して、Googleフォームの冒頭で調査目的を十分説明した上で、倫理的配慮に関する各項目（回答は自由意志で決められること、回答が強制ではないこと、プライバシーの保護、調査結果の公表の方法）について記載した。なお、調査への回答をもって、調査に同意したものとみなした。

分析方法

問1から7については回答の分布を集計した。問8から11の自由記述データの分析には、計量テキスト分析用のソフトウェアであるKH Coder3. Beta.03i（樋口，2020；以下、KH Coder）を用いた。問8では語の出現頻度の多さを調べる頻度分析を行い、問9～11に関しては卒業後のキャリア形成を探索的に検討するため、「年齢」を外部変数として語のつながりを調べる共起ネットワーク分析を行った。表記のゆれに関しては、前後の文脈を確認した上で問題がないと判断された場合は頻度が多い語に統一した（例：「先生or教授」→「先生」、「学寮or学寮研修or研修」→「学寮」）。また、「特になし」「ない」などの記述は分析対象外とした。さらに、「～と思うこと」などの質問文の問いかけに対応する形での「～と思います」といった回答で用いられている語も分析対象外とした。語のつながり（共起）の指標にはJaccard係数を用いた。Jaccard係数は概ね0.1を超えていればある程度意味のあるつながりを意味し、0.2を超えていると強いつながりを意味するとされる（樋口他，2022）。

結果と考察

日常的に行っている活動

選択肢の各項目について、各活動を日常的に行っている人の割合をFigure 1に示した。仕事をしていると回答した人の割合は92.31％であり、回答者のほとんどが何らかの仕事を持っていることが明らかになった。また、家事、育児、介護の項目をしている割合はそれぞれ66.03％、33.97％、1.92％であり、仕事と家庭のことを両立している人が多くいる様子がうかがえた。それだけではなく、自己研鑽や余暇活動をしている人も少なからずいることがわかった（それぞれ、23.08％、39.10％）。以上から、多くの心理学科卒業生が仕事や家事・育児といった義務的活動を指す二次活動だけでなく、学習や趣味娯楽といった余暇活動を指す三次活動（活動の分類と定義については、総務省統計局（1996）参照）を行うことで、ワーク・ライフ・バランスを取ろうとしていることが示唆された。ライフステージによってバランスの取り方やその難易度は異なると考えられるが、心理学科卒業生がそれぞれに仕事と生活をともに充実させて人生を歩んでいることが推察される。

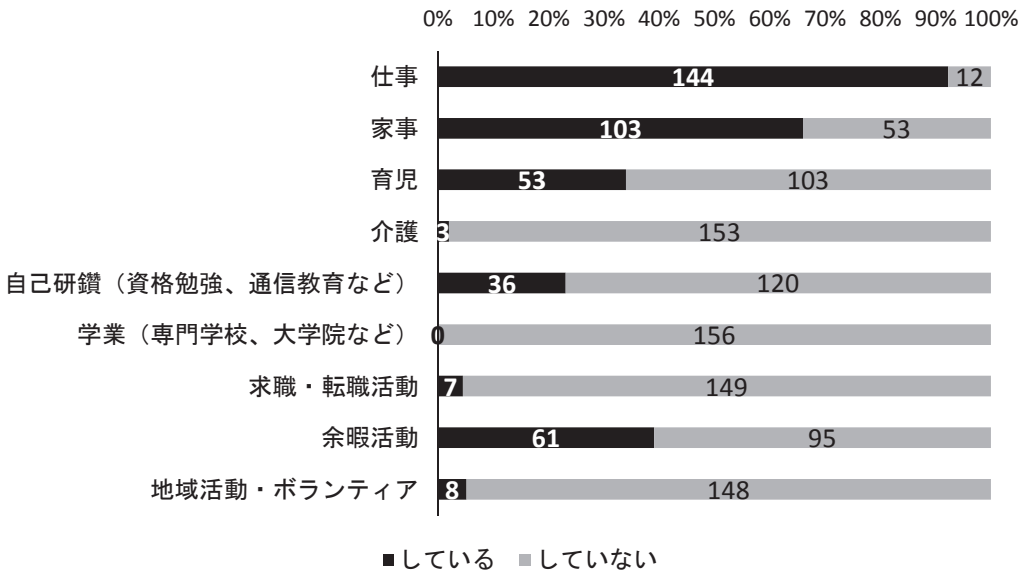

Figure 1　各活動を日常的に行っている人の割合

注．図内の数値は度数（人）を表す。

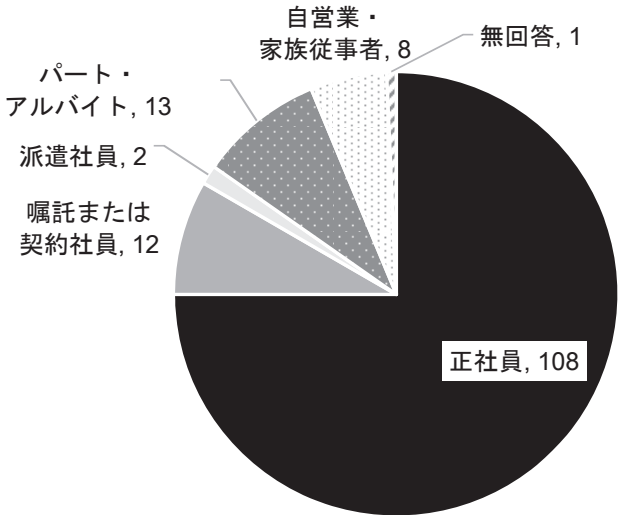

Figure 2　現在の仕事の雇用形態の分布

注 1．現在仕事をしている人144名が対象。

注 2．図内の数値は度数（人）を表す。

現在の仕事の雇用形態及び業種

現在仕事をしている人の雇用形態の分布をFigure 2に示した。75.00％と回答者の多くが正社員として働いていることが明らかになった。令和2年版厚生労働白書（厚生労働省，2020）によると、2019年の女性の労働者全体に占める非正規雇用の割合は56.0％だった。これと比較すると、本調査における正規雇用の割合は高いと言える。昭和女子大学では、女性の就労が当たり前となった時代の変化に対応し、卒業後は自分に適した職業に就いて、社会人・職業人として自立した人生を歩むことができるよう、キャリアデザイン・ポリシー（社会的・職業的自立に関する方針）を策定し、キャリア教育を推進している（昭和女子大学，2022a）。また心理学科でも、学科の学生を対象に、OGや内定者によるガイダンスや公務員対策セミナーなどを実施している（昭和女子大学心理学科，2022）。これらの在学中のキャリア教育

Table 2　現在の仕事の業種の分布（人数の多い順）

業種	*N*	割合（%）
医療・福祉	34	23.61
教育・学習支援	22	15.28
金融・保険業	19	13.19
サービス業	14	9.72
卸売業・小売業	10	6.94
情報通信業	8	5.56
製造業	8	5.56
建設業	6	4.17
コンサルティング、シンクタンク	3	2.08
不動産業	3	2.08
公務員	2	1.39
広告	2	1.39
運輸業	2	1.39
宿泊業・飲食業	2	1.39
その他、無回答	9	6.25

注．現在仕事をしている人144名が対象。

及びキャリア支援が、「正規雇用で働く」という卒業生の選択を促している可能性がある。その一方で、パート・アルバイトや自営業・家族従事者などの働き方を選択している人も一定数見られた。今回の調査ではその経緯や理由を尋ねていないが、それぞれが自身のライフスタイルに合わせて働き方を選択していると考えられる。

次に、現在仕事をしている方の業種の分布をTable 2に示した。回答者の業種は多岐にわたっていた。中でも、医療・福祉、教育・学習支援、金融・保険業は全体の10％を超えていた（それぞれ、23.61％、15.28％、13.19％）。この結果を、2017年度の昭和女子大学全学科の卒業生を対象に実施した昭和女子大学卒業生調査（昭和女子大学, 2020a）の結果と比較すると、医療・福祉、教育・学習支援の割合はやや高く、製造業、情報通信業の割合はやや低いと言える。また、過去3年度の心理学科の卒業生の卒業時点の就職先の業種の分布（昭和女子大学, 2020b; 2021; 2022b）を見ると、卸売・小売業とサービス業への就職が多く（それぞれ全体の20％前後）、医療・福祉、教育・学習支援への就職は決して多くない（あわせて全体の10％程度）。これらと今回の調査結果を比較すると、医療・福祉、教育・学習支援の割合は高く、卸売・小売業、サービス業の割合は低い。医療・福祉及び教育・学習支援は、心理支援や発達支援のように心理学の学びを活かしやすい業種である。本調査に回答した卒業生は限られており、また職種を尋ねなかったため断定的なことは言えないが、卒業から時間を経て、心理学の学びを活かした働き方をしている人が増加しているのではないかと考えられる。

卒業後の最初の勤務先における勤務について

卒業後の最初の勤務先に現在も勤務しているかどうか尋ねた結果、「はい」が72名（46.15％）、「いいえ」が83名（53.21％）、無回答が1名（0.64％）だった。「いいえ」と答えた人を対象に最初の勤務先での勤務年数を尋ねた結果、及び、最初の勤務先に現在も勤務していると回答した人の人数を合わせた結果をTable 3に示した。厚生労働省（2022）によると、新規大卒就職者（平成30年3月卒業者）の就職後3年以内の離職率は31.2％であり、過去20年を振り返っても30％前後で推移している。本調査において現在も最初の勤務先に勤務していると回答した人の中には卒業後3年未満の人も含まれているものの、3年未満の離職率は全体の20％程度であり、厚生労働省（2022）の結果と比較すると3年以内の離職率は低いと言える。この点から、回答者における卒

Table 3　卒業後の最初の勤務先での勤務年数

勤務年数	*N*	割合（%）
1年未満	13	8.33%
1年以上3年未満	19	12.18%
3年以上5年未満	15	9.62%
5年以上10年未満	21	13.46%
10年以上	11	7.05%
無回答	5	3.21%
1社目の勤務を継続中	72	46.15%

業時に決定した就職先での仕事に対する適性や満足度が高いことが推測される。在学中のキャリア教育とキャリア支援が、卒業時にひとりひとりの特性や希望に合致した就職をすることに結びついている可能性があるだろう。

取得済みの心理学関連の資格について

心理学関連の資格を有している人の人数をTable 4に示した。心理学関連の初めての国家資格である公認心理師資格の制度が施行されたのが2017年であり、公認心理師と臨床心理士資格は大学院修了後に取得できる資格である。また、心理学科において准学校心理士の資格が取得可能になったのは2022年度以降である。これらのことから、回答者が心理学科卒業時点では取得できなかった資格もあり、卒業後に取得した人もいることがわかる。卒業後も、自身で目標を定め心理学に関連のある学びを継続している人がいること、また、それを仕事に活かしている可能性があることがうかがえる。それぞれの卒業生が取得した資格をどのようにキャリアに活かしているかを調べることは、今後の重要な課題であろう。

Table 4　心理学関連の資格を有している人の人数

資格	*N*
公認心理師	31
臨床心理士	20
社会調査士	53
認定心理士	32
認定心理士（心理調査）	21
学校心理士・准学校心理士	2
その他	6

Table 5　印象に残っているエピソード頻出語（上位10位）

抽出語	*N*
学寮	50
先生	48
ゼミ	25
卒業	18
楽しい	17
心理	17
実験	14
論文	14
授業	12
検査	9

心理学科で特に印象に残っているエピソードについて

未回答を除いた122名の自由記述データ（平均41.14文字，標準偏差47.16，範囲2－348）について、語の出現頻度の単純集計結果をTable 5に示した。

「学寮」が122名中50名（40.98%）と最も頻度が多かった。学寮研修は本学において伝統的な行事であり、教員と学生が寝食を共にし、相互理解を深めながら勉学や労作を行うことで人材育成を図る重要な教育活動として位置づけられている。最近では、より学生が主体となって学寮を企画・運営する「プロジェクト型学寮」として、主体性、協調性、リーダーシップを育成する機会となるよう位置づけられている。したがって、卒業後も印象に残り続ける学寮研修の機会を最大限に活かし、単なる思い出に留まらないように、今後のキャリア形成につながるプログラムが実現できるよう学生の企画・運営をサポートしていくことが重要だと考えられる。

なお、「学寮」に次いで、「先生」が48名（39.34%）、「ゼミ」が25名（20.49%）と続いていた。特定の教員とのエピソードを挙げるよう教示した影響が考えられるものの、詳細なエピソードも複数寄せられており、教員と学生の距離感が近いことが心理学科に対するポジティブな印象につながっていることが示唆された。

今に活きている心理学科での学びについて

未回答を除いた121名の自由記述データ（平均47.46文字，標準偏差47.50，範囲2－351）について、共起ネットワーク分析の結果をFigure 3に示した。

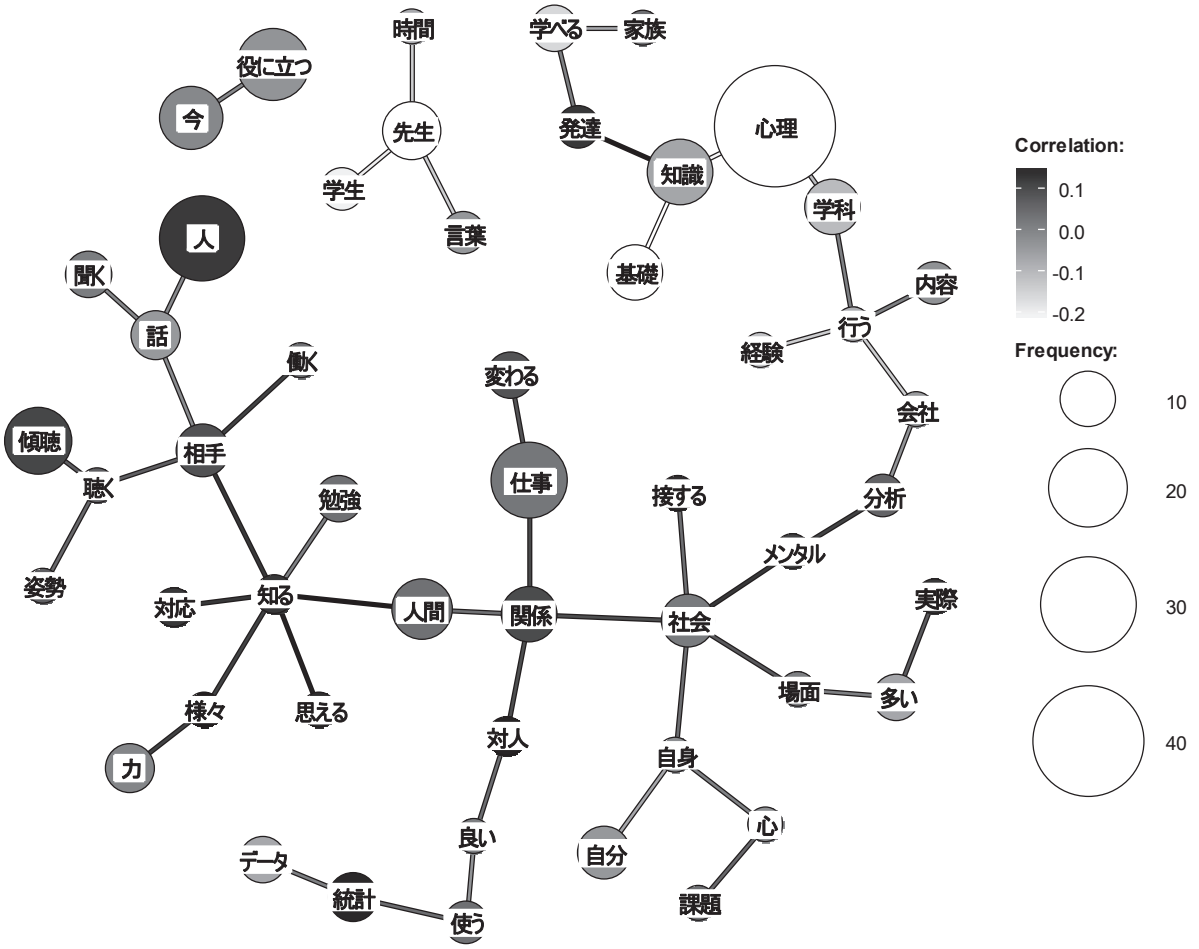

Figure 3　心理学科で学んだことで今に活きていること

注1．円の大きさは語の出現頻度を意味している。
注2．色が濃いほど卒業して年数が経っている回答者に多い語あるいはつながりを意味する。

卒業後間もない頃は「心理」学の「基礎」を学べたことや、「先生」と「学生」の距離感が近いことで興味関心を持って学べたという漠然とした感覚に留まっていることがうかがえる。一方で、卒業して年数を経ていくにつれて、接客する中で「人」の「話」を「傾聴」する、「相手」を「理解」して「対応」する、「統計」の知識を仕事で使っている、など心理学の専門的な学びが仕事上で役立っていると実感するようになることがうかがえる。また、子育ての中で「発達」心理学の知識が役立っているとの回答もあり、生活の中でも心理学の知識が意識される場面が出てくることがうかがえる。

近年、心理学科では、社会における心理学の活かし方を学ぶ「心理学総合演習」などの体験的な学習の機会を設けているが、社会の中で心理学が活用されている、あるいは活用できるということが、自分のキャリアとどのようにつながるのかをさらに明示していくことも求められるだろう。

大学時代にやっておけばよかったことについて

未回答を除いた128名の自由記述データ（平均40.48文字，標準偏差43.45，範囲2－261）について、共起ネットワーク分析の結果をFigure 4に示した。

卒業後間もない頃は「アルバイト」や「ボランティア」、「留学」などの「キャリア」に関わる何らかの「活動」をやっておけば良かったと大まかに感じる傾向がうかがえる。一方で、卒業して年数を経ていくと、活動単位ではなく仕事に関わる「資格」を取ったり「授業」を受けたりしておけば良かったと、より具体的にキャリアと関連する学びの必要性を感じることがうかがえる。また、

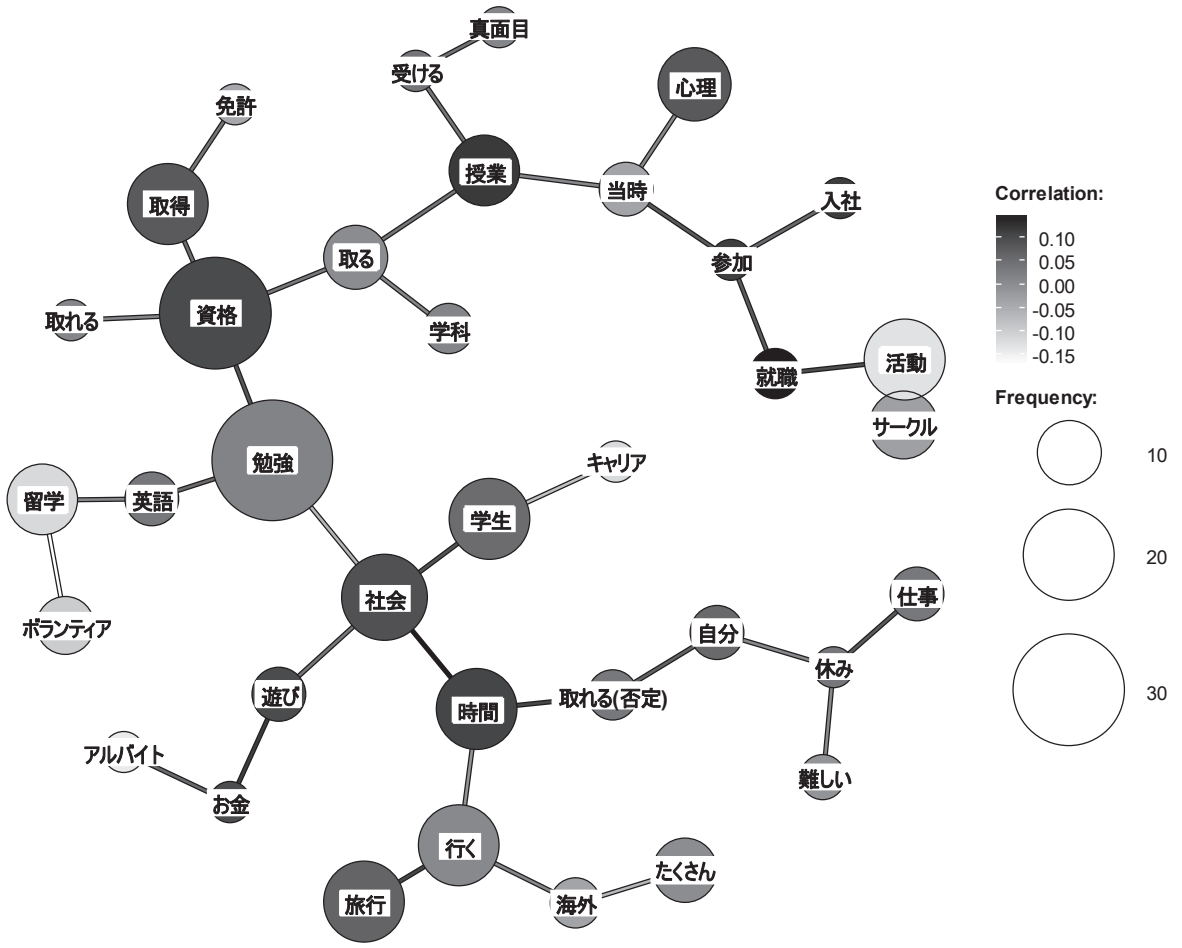

Figure 4　大学時代にやっておけばよかったこと

卒業後は自分の「時間」が「取れな」くなることから、「遊び」「旅行」などの時間を楽しんでおけば良かったとプライベートの時間の貴重さに気づいていくこともうかがえる。

すなわち、卒業後間もない頃から「キャリア」を意識するものの、アルバイトやボランティアなどの課外活動に焦点があたっており、在学中は、大学におけるカリキュラムの何がどのように「キャリア」とつながりを持つのかは明確になっていない可能性がある。したがって、在学中より自分が学んでいるカリキュラムが、その先の「キャリア」とどのようにつながっていくのか見通しを示すキャリア教育が求められると考えられる。この点に関連して、2023年度より心理学科では、心理学を活かしたキャリア目標とそれぞれの目標の実現に近づくための科目群を示す「キャリア準備履修プログラム」を開始する。在学生が、将来のキャリアを見据えて主体的に学ぶきっかけとなることが期待される。

キャリア選択において大切にしてきたこと、これから大切にしていきたいことについて

未回答を除いた134名の自由記述データ（平均48.75文字，標準偏差54.34，範囲3－489）について、共起ネットワーク分析の結果をFigure 5に示した。

卒業後間もない頃は、「成長」できるか、「楽しい」「幸せ」と思えるかどうか、「家庭」「子ども」と「仕事」との「バランス」が取れるか、など人によって何を大切にしているのかが異なることがうかがえるが、その職場では“～ができるか”といった環境面や条件面を重視しやや受け身でキャリアを考えている点では共通していると思われる。一方で、卒業して年数を経ることで、同じ「バランス」でも「仕事」も「プライベート」も大切にして「自分」の人生を充実させる、つまりワーク・ライフ・バランスの大切さを意識する、

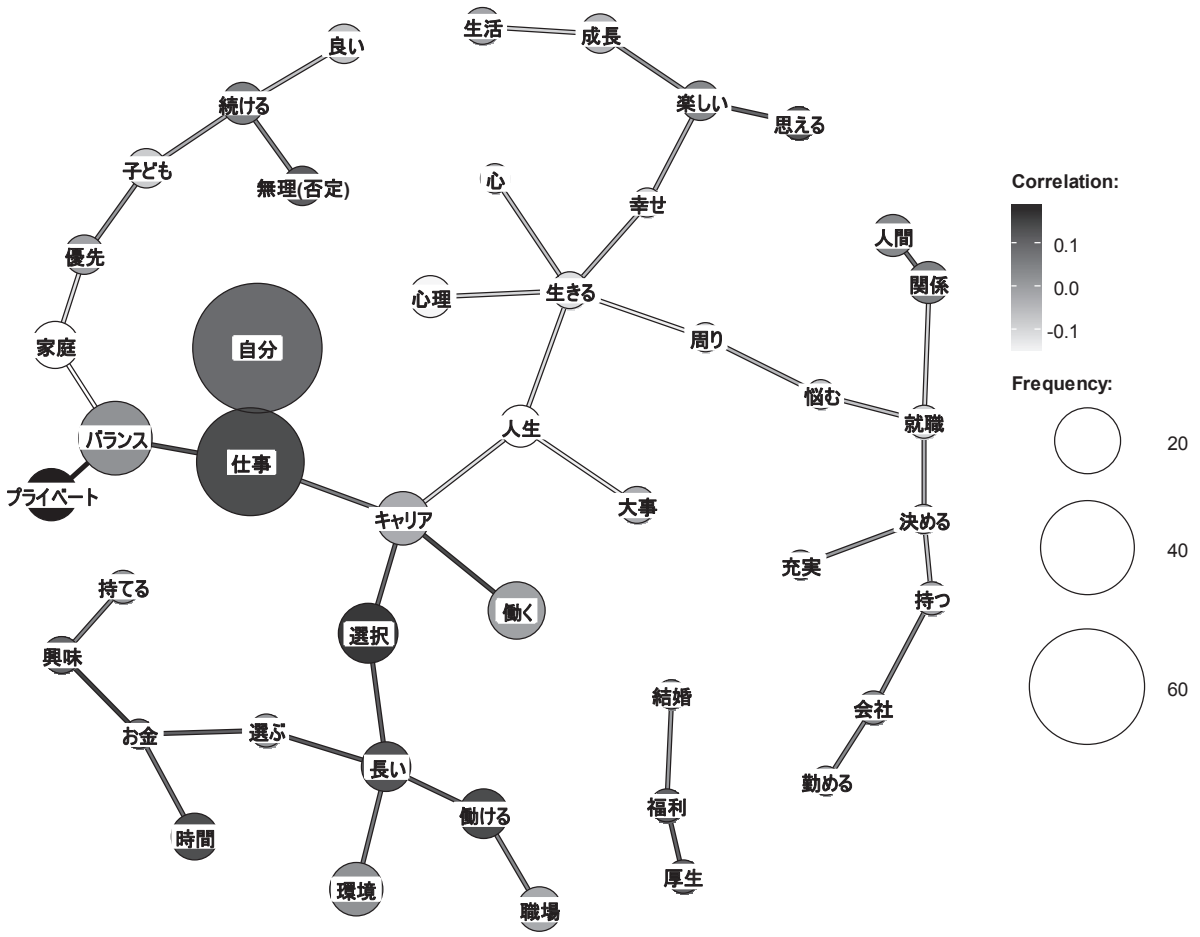

Figure 5　キャリア選択において大切にしてきたこと、これから大切にしていきたいこと

「無理」なく「長く」働けるか、「福利厚生」はしっかりしているかなど「安定性」を大切にするという傾向がうかがえる。また同時に、「自分」が「興味」が持てるかといった主体的な意識も出てくることもうかがえる。

キャリア選択に必要な活動を自らの力で行えると感じる“キャリア選択の自己効力感”が高い場合、主体的なキャリア選択が行える（安達，2021）とされていることからも、職場の環境・条件面のみを重視した受け身のキャリア選択だけでなく、キャリア選択を自ら行えているという感覚が感じられるような教育機会、キャリア支援が求められると考えられる。

総合考察

本稿では、昭和女子大学心理学科の過去30年間の卒業生を対象に、生涯キャリアの実態を明らかにすることを目的とした。

調査の結果から、卒業生が仕事と家庭を両立しているだけでなく、自身が学びたいことややりたいことを見つけ、自己研鑽や余暇活動にも時間を割いている人もいること、また、卒業後に新たに心理学に関連する資格を取得している人がいることがわかった。また、「キャリア選択で大切に思うこと」についてのテキスト分析の結果から、特に卒業から時間を経ると、自分を主体とした仕事の選択やプライベートとのバランスを重視するようになる傾向が見られた。以上から、卒業生が、全員ではないにしても、自身が学びたいことややりたいことを見つけて日々を送っていることが推測される。加えて、政府がその実現を推進しているワーク・ライフ・バランスの充実（内閣府 男女共同参画局 仕事と生活の調和推進室，2008）を重視している人も少なくないことが示唆された。

また、現在の仕事の雇用形態における正社員の

割合、卒業後の最初の勤務先での勤務の継続期間は、日本における成人女性の平均と比較すると、心理学科卒業生が高い数値であることがわかった。在学中のキャリア教育とキャリア支援がこれらのポジティブな結果に少なからず影響していることがうかがえる。在学生・卒業生が生涯キャリアを形成していく上で、今後も現在のキャリア教育とキャリア支援の方向性を維持していくことは、重要であると言える。

さらに、医療・福祉及び教育・学習支援の業界で働いている人が、2017年度の昭和女子大学全学科の卒業生を対象とした調査の結果（昭和女子大学, 2020a）や、過去3年度の心理学科の卒業生の卒業時点の就職先の業種の分布（昭和女子大学, 2020b; 2021; 2022b）よりも多いことがわかった。また、前述のように、卒業後に新たに心理学に関連する資格を取得している人もいた。テキスト分析の結果からは、卒業から時間を経て、心理学の専門的な学びと仕事のつながりや心理学科での学びがキャリアを形成する上で役立つことを改めて認識するようになることが示された。以上から、卒業後にワーク・ライフ・バランスの取れた生涯キャリアについて考えを深める中で、心理学の学びを活かすことができる働き方をしたいと改めて考える人も出てくることが示唆された。

以下に、本調査の課題を挙げる。1点目に、回答者のバイアスがあるという点が挙げられる。本稿の結果は、調査を依頼した人の一部の回答によるものであり、現在の生活に時間的・精神的な余裕がある人が多いだろうという点には留意が必要である。2点目に、生涯キャリアという考え方にもとづいて仕事以外の生活全体を含めた実態を調査することを目的に調査を実施したが、現在仕事をしていないという回答は156人中12人（7.69%；Figure 1）と少数にとどまった。「卒業生キャリア・アンケート」という調査の名称から仕事をイメージした方も少なくないと推測され、現在仕事をしていない人の実態はあまり把握できなかった。3点目に、幅広い年齢の人を対象に回答を得ることはできたものの、横断的な調査であるということが挙げられる。データ収集の難しさはあるが、生涯キャリアの形成についてより詳細な実態を知るためには、卒業後どのようなキャリアの変遷をたどってきたのかを縦断的に知る必要があるだろう。

本調査により昭和女子大学心理学科卒業生の生涯キャリアの実態の一端が把握できたことは、在学生のキャリア教育とキャリア支援をさらに充実したものとするための貴重な資料となるだろう。本調査の結果を在学生に還元することで、在学生が生涯キャリアについて考えを深めることにつなげていきたい。

謝　辞

調査にご協力いただいた心理学科卒業生のみなさま、調査の実施にあたりご尽力いただいた心理学科助手のみなさまに感謝申し上げます。

註

1）OGネットワークは心理学科において2012年度に整備され、2012年度以降の卒業生には卒業時に加入希望を募っている。2012年度以前の卒業生には、ホームカミングデーの際に加入希望を募ってきた。

引用文献

安達智子（2021）．キャリア決定―未決定の規定因―大学生，フリーター，無業者の比較から―　キャリア・カウンセリング研究，*23*，15-23.

樋口耕一・中村康則・周　景龍（2022）．動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング――フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析――　ナカニシヤ出版

樋口耕一（2020）．社会調査のための計量テキスト分析［第2版］――内容分析の継承と発展を目指して――　ナカニシヤ出版

国立社会保障・人口問題研究所（2017）．現代日本の結婚と出産――第15回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書――　国立社会保障・人口問題研究所　Retrieved December 15, 2022 from https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf

厚生労働省（2015）．平成25年版　厚生労働白

書――若者の意識を探る――　厚生労働省 Retrieved December 12, 2022 from https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/
厚生労働省（2020）．令和２年版　厚生労働白書――令和時代の社会保障と働き方を考える――　厚生労働省　Retrieved December 8, 2022 from https://www.mhlw.go.jp/content/000735866.pdf
厚生労働省（2022）．新規学卒就職者の離職状況を公表します　厚生労働省　Retrieved December 8, 2022 from https://www.mhlw.go.jp/content/11652000/000845829.pdf
内閣府（2017）．平成29年版男女共同参画白書　内閣府　Retrieved December 15, 2022 from https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/pdf/h29_tokusyu.pdf
内閣府（2022）．令和４年版少子化対策白書　１部　少子化対策の現状（第１章３）　内閣府　Retrieved December 15, 2022 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2022/r04webhonpen/html/b1_s1-1-3.html
内閣府 男女共同参画局 仕事と生活の調和推進室（2008）．仕事と生活の調和とは（定義）　内閣府　Retrieved December 15, 2022 from https://wwwa.cao.go.jp/wlb/towa/index.html
総務省統計局（1996）．平成８年社会生活基本調査　用語と分類　統計局ホームページ　Retrieved December 8, 2022 from https://www.stat.go.jp/data/shakai/1996/4.html
昭和女子大学（2020a）．2020年度　卒業生調査集計結果　昭和女子大学　Retrieved December 8, 2022 from http://univ.swu.ac.jp/files/2021/10/2020sotsugyoseichosa.pdf
昭和女子大学（2020b）．2020年卒　進路状況　昭和女子大学　Retrieved December 8, 2022 from https://office.swu.ac.jp/files/2020shinro_daigaku_2.pdf
昭和女子大学（2021）．2021年卒　進路状況　昭和女子大学　Retrieved December 8, 2022 from https://office.swu.ac.jp/files/2021shinro_daigaku.pdf
昭和女子大学（2022a）．昭和女子大学キャリアデザイン・ポリシーとキャリア科目の体系　Retrieved December 12, 2022 from http://swuhp.swu.ac.jp/kyomu/c_policy/f_careerdesign.pdf
昭和女子大学（2022b）．2022年卒　進路状況　昭和女子大学　Retrieved December 8, 2022 from https://office.swu.ac.jp/files/2022shinro_daigaku.pdf
昭和女子大学心理学科（2022）．就職・進学の支援 Retrieved December 11, 2022 from https://swuhp.swu.ac.jp/university/shinri/career/index.html
山﨑京子・平林正樹（2018）．未来を拓くキャリア・デザイン講座　中央経済社

のざき　まり（昭和女子大学人間社会学部心理学科）
いわやま　たかゆき（昭和女子大学人間社会学部心理学科）
わたなべ　ゆたか（昭和女子大学人間社会学部心理学科）
いけがみ　しんぺい（昭和女子大学人間社会学部心理学科）
まつざわ　まさこ（昭和女子大学人間社会学部心理学科）